

天声人語

作曲家ショパン、劇作家チエ

一ホフ、儒学者の頼山陽、政治家小村寿太郎は同じ病魔に人生を絶たれた。結核である。エジプトのミイラから結核の痕跡が見つかっており、人類と結核菌の闘いは太古にさかのぼる▼へたばしるや鳴叫喚す胸形変。俳人石田波郷は結核治療のため肋骨を一度に数本切除し、手術の痛みと自分のうめき声を壯絶な句に詠んだ。病苦は56歳で没するまで続いた。辞世の句に「今生は病む生なりき鳥頭。」▼結核を題材にした小説には、若き作家や深窓の令嬢が登場する。上品で織細な若者が罹患し、縁あふれる高原で療養するといった印象があるが、現実は違う。「結核菌は人を選びません。英國でも日本でも患者が急増したのは、産業革命から。すし詰めの工場で働く労働者層が最も多く犠牲になりました」と加藤誠也・結核予防会結核研究所長(62)は話す▼明治から戦前にかけて結核は「不治の病」「亡国病」などと恐れられた。戦後は特効薬が普及し、治療法が確立。患者は劇的に減った▼とかく「過去の病気」と思われがちだが、現状は撲滅にはほど遠い。国ごとの罹患率を比べると、日本は欧米先進国には及ばない「中進国」。医療機関や警察署でさえ集団感染が起っているのは、おそらく官にも民にも油断が生じていたからだろう▼きょうから結核予防週間。近年は、特効薬すら効かないゾンビのような耐性菌が各国で猛威をふるう。この恐るべき病原菌と人類との闘いはまだまだ終わっていない。